類型学研究　(2011), *105-125*

さまざまな＜膠着＞　―＜膠着＞再説[1]―

まつもと　ひろたけ

はじめに

（1）小論の筆者が勉強させてもらった言語学研究会の文法研究は、文法的な意味・機能にそった文法的なカテゴリーのとりだしに代表される内容面のほりさげに特色がある。しかし、表現面に関して無関心だったとはまったくいえない。文法教科書の構成にあってさえ、かたちのつくりかたやくみたてという表現手段をめぐる記述と、意味・用法にわたる内容面の記述とがセットになっていなくてはならないという原則が、構文論のテキストである『にっぽんご・4 下』(未公刊)の編集のさいにも強調されていたことを実地に見聞している。また、教科研国語部会の 70 年代の夏期合宿研究会で奥田靖雄が「文法的なてつづき」をとりあげて講義している。そこで受講者は膠着と融合 fusion、さらに分析的なくみたてと総合的なくみたてなどについてまなんだ。

鈴木重幸 1973「膠着」も、文法的なてつづきをめぐってかかれたものである。「言語学の用語」[2]というシリーズのひとつだが、のちの鈴木重幸の著書にはおさめられていない。鈴木「膠着」に「接辞づけあるいは接辞の性格にみられる二つの傾向 ― 膠着と融合 ― については、A. A. レフォルマツキーが例をあげながら要領よく説明しているの

---

[1] 筆者は以前、松本 1975「総合的なかたち synthetic form をめぐって」のなかで膠着にかかわる問題をとりあげたことがある。その後 2006～2008 年度別府大学文学部で「言語学概論」の講義をさせられたとき、あらためて「膠着」についてかんがえたことが、小論のもとになっているが、前稿との関連で「再説」とした。

[2]実現は別として、研究会メンバーがそれぞれ項目を分担して、将来は研究会版の「言語学用語辞典」をつくろうということなっていた。「イザフェト изафет もいれていいんだぞ」というようなことを、なにかの機会にだが奥田先生がいっていた記憶がある。

で、それを引用しよう…」とかいているように、「膠着」はレフォルマツキーの説明を中心に鈴木が解説をくわえる体裁をとっているので、鈴木の他の論文とおなじ一冊におさめる気にならないのだろうが、膠着について日本語で一番くわしくのべている文献が、初出の発表でしかよめないのは、やはり不便だと今回感じた。

（2）言語の形態論的なタイプとしての日本語の膠着性をめぐっては、なお、議論がおさまったとはいえない。鈴木「膠着」でさえ、名詞の曲用をとりあげるとき、「くっつきが単語ではなく、接辞であるとすれば」という条件をつけている。標準語の格のマークが名詞の語幹末の音声のちがいに影響されることもなく、首尾一貫して「標準的」であるうえ、典型的な膠着語とされるチュルク諸語ほかのアルタイ語族にみられる、語幹と接辞のあいだに母音調和さえもおこしていない点を考慮してであろう、アルタイ語学者は、竹内和夫 1996「トルコ諸語の品詞」のように、「トルコ諸語の格語尾に相当するのが、ニホン語では、いわゆる助詞ですから、…」と、日本語の格助詞の単語性をみとめているようである。日本語からみると、母音調和でさえ、語幹の母音グループのちがいにともなう、非標準的な接辞という方向へとつなげてかんがえたくなるが、そのような方向は一般言語学的には通用しにくいのだろう。日本語の名詞の曲用を、膠着でなく分析的なてつづきとみるたちばは、山田孝雄『日本文法論』などと共通している。ただし、山田とならぶ非官学がわの松下大三郎は、『標準日本文法』などで格助詞ほかの単語性をみとめていない。また、最近ロシアででたアルパトフほか 2008『日本語の理論文法』（原本は日本語題名）は格助詞を中心とした名詞の曲用を接辞づけとはしていない。これは以前、ポリヴァーノフがかかり助辞ハに関して、ハ行子音に initial 以外でみられる音変化（ハ→ wa）が生じていることから、その単語性を、さらに一般的に助詞の単語性をみとめなかった態度と対立している。

日本語動詞の形態論に関しても、竹内和夫 2008「アルタイ語学者からみたニホン語文

法」は、山田孝雄の複語尾説にかよう観点にたっている。満州文語、ハンハ・モンゴル語、トルコ語の動詞活用が膠着的である例をあげながら、日本語の動詞の語形のことを、

「知ら・せ・られ・なかっ・た」と５単語に分解して、語幹助動詞と過去・完了の助動詞が「膠着」したものとする。詞が単語ないし付属語ならば「膠着」ではないはず。未然形とはなにもの？「知ら」という単語などない。「なかっ」という単語もない。sir-、nak- のような子音語幹をニホン語は許さない[3]。この点はアルタイ語とちがう。

と、助動「詞」という単語(付属語)をみとめるなら膠着とはいえないことを指摘する。国文法のながれは、膠着としているが、日本語の動詞のかたちが、アルタイ諸語の膠着とはかけはなれたつくりであることはあきらかである。もっとも、表現面の非膠着性＝融合性ということとは別の観点から、膠着性が問題にされていることは、あとでとりあげる。

（３)それはそれとして、鈴木「膠着」の説明は他にくらべてはるかにくわしいので、膠着に関してかんがえをめぐらすにはここから出発するのが、問題点を検討しやすい。鈴木「膠着」がくわしいのは、そこに紹介されているレフォルマツキーの、融合と対照させての膠着の性格のとりだしがこまかいせいだとおもわれる。以下、鈴木「膠着」をもとにかきつらねていくが、レフォルマツキーが膠着の特徴としてあげる５項目とは 1. 語根(語幹)は変化しない、2. 接辞は単義的である、3. 接辞は標準的である、4. 接辞をとりはずした語幹、語幹＋接辞は独立単語(語形)をなす、5. 語幹と接辞とのさかいめがはっきりしている、のようにまとめられる。

だが、この５項目の膠着へのかかわりぐあいは、おなじひとつのレベルにあるとはいえないのではないか。たとえば５の語幹と接辞とのさかいめが(さらに接辞どうしのさかいめもはいるだろう)、はっきりしているというのは、膠着現象を目にした出発点での印

[3] 動詞語幹の認定のことはここではとりあげない。

象か、1－4 の基準にもとづいた最終のまとめという風な基準で、これを分析的にとらえた結果が 1－4 であるようにみえる。

パラディグマチックな対立からみた膠着

（4）また、基準 1. 語根（語幹）は変化しない、と 3. 接辞は標準的である、というのは、シンタグマチックな接辞づけが膠着か屈折かの性格のちがいを問題にしている当の語形、単語をみているだけではとりだすことのできない基準である。1 も 3 もともに他の語形、単語との（ただし、当の語形、単語とおなじ内容面、同一の文法的なカテゴリーどもを共有しているものだが）、パラディグマチックな対立を確認してはじめて認定をくだすことのできる基準といえる。

たとえば、英語の複数接辞の -s は、語幹末の音声的なちがいによる変異を考慮しないなら[4]、膠着的な接辞と認定される。接辞として単義的で、とりはずした語幹は語幹=単語として独立できるから。しかし、パラディグマチックに他の複数系列の語形をなが

---

[4] スペイン語の名詞複数形に関して、ヤルツェーヴァ主編 2001『世界の諸言語　ロマンス諸語』（ロシア科学アカデミー・言語学研究所）のナルモフ「スペイン語」では、複数接辞 -s、-es のつかいわけは語末の音声条件にしたがうが、「そのさい語幹はなんの音声変化もうけない（膠着的なやりかた）」と説明する。うえのスペイン語の名詞複数の説明では、接辞には条件にしばられた音声変化があってもいいが（母音調和もその一種といえる）、語幹は変化しないことが、接辞の標準性以上に膠着にとって重要であるかのようである。しかし、レフォルマツキーにはこのような語幹（語根）の標準性ということは直接にはかたられていない。もっとも、屈折タイプの語幹の非単語性からみれば、膠着タイプの語幹の標準性は、語幹の単語性ということと、同義になるようにおもえる。

韓国語の主格助辞に -ga、-i の対立があるようではまるっきり標準的とはいえないが、-ga、-i が名詞語幹に表現面では膠着し、語幹末の音声のちがいによって条件づけられている。なお、-i は -ga とちがって、語幹末の子音と一体化した音節をなすことは、膠着との関連ではどうとらえられているのか。

めわたすと、ox-en、child-ren、feet のような痕跡化した旧複数形とのはりあい関係がみえてくるので、典型的な膠着とまではいいにくくなる。鈴木(重)「膠着」でも、ここのところをとりあげて、「…名詞の複数の語尾 -s は、右の 1、2、4、5 の基準では膠着的であるが、3 の基準では融合的である。」とのべている。

しかし、パラディグマチックな対立のなかからしかとりだせない 3 の基準の類は、当の形式自体にそなわっている性格からみちびきだされた基準にくらべると、やはり二次的といわざるをえないだろう。シンタグマチックなつらなりに位置する要素そのものが一定の性格(うえのばあいは膠着性)をもつことと、他との関係(構造)のなかにおいて、はじめて、ある性格が(うえのばあいは融合性が)あらわれるということとは、区別してかんがえることができる。

英語名詞の複数形のつくり関して、バルフダロフほか 2000「英語」などで「膠着的なタイプのユニバーサルな形態である -s を有する形式」のような「膠着(的)」という用語も、これにもとづいているだろう。ナルモフ 2001「スペイン語」の、複数形 –s、-es については、英語の oxen ほかのような例外形がないとすれば、英語の複数形のばあいとちがって、3 の基準での融合性が問題にならない。

単語つくりのさいの接辞づけの例になるが、さかなーや、はなーや、呉服ーや、ケーキーやなどの接辞ーやの膠着的な性格についても、これらでみれば変化しない単語＝語根との関係で指摘することができるわけだが、さかーや、のような転音現象をかかえこんでいることが、パラディグマチックな対立の確認からでてくるため、典型的な膠着とはいいにくくなっている。鈴木「膠着」では、転音のほかに連濁やまっーくろ、まっーしろにならぶ、まっーか、まっーさおなどの例もあげて膠着からのずれを指摘している[5]。

---

[5] この点で、サピア『言語』が英語の膠着的な接辞の例として、おなじように単語つくりのてつづきからだが、farmer、goodness の接辞をあげるのは、用心ぶかい。「…-er と -ness は、同時に独立語（farm、good）でもある語幹要素に、まったく機械的に接辞されている。-er、-ness は独立的に有意味な要素では決してないが、過つことのないほ

非膠着的といえるかたちをかかえこんだ、この種の、それ自体のつくりでは膠着的な性格の形式を、膠着のがわからなづけるとしたら、典型的、一次的な膠着に対して、二次的な膠着といういいかたをつかってもいいようにおもわれる。

膠着の表現面

（5）レフォルマツキーの基準にてらして､同一の形態論的なカテゴリーに属する他の語形との、パラディグマチックな対立関係までみないと膠着とはいえないばあい以外でも、その語形自体が膠着と認定できない面をもっていることがある。それは、レフォルマツキーの基準の 2.接辞が単義的か重義的かと、4.接辞をとりはずした語幹(＋接辞)が単語(語形)をなすかなさないかとの関係に、ねじれが生じているばあいである。2 の基準は膠着接辞の意味のありかたという内容面にかかわる。それに対して 4 の基準は、膠着接辞(群)が語幹にくっついていくさいの、くっつきかたという表現面にかかわっている。

鈴木「膠着」にみられる､「日本語で主語となっている名詞の「―は」の形は、が格(主格)のとりたての形であって、この「は」は格ととりたての意味をもつ重義的な接辞だとみることもできる。そうみるとしたら、この形は部分的に融合的な性格をもっているといわなければならない…。」という指摘は、N ハのかたちが語幹＋接辞の表現面での膠着的な性格と、接辞－ハの内容面での重義性という融合的な性格とからなりたっていることをのべている。

ど直接的に、その意味(行為者、抽象的性質)を伝えている。」は、接辞にみとめられる表現面での膠着性(語幹の単語性と、もちろん語幹＋接辞の単語＝語形性)と内容面での膠着＝単義性とをふたつともそなえた例にしているだけでなく、痕跡化したかたちがあらわれたりすることも、慎重にさけたえらびだしのようである。ただし、膠着が文法的なてつづきの説明でまず第一にとりあげられるものだとすれば、ここでも文法的なかたちがしめされれば、なおよかったか。

おなじことが、英語の動詞語形のうちの「三・単・現」の -s のついたかたちについてもいえるだろう。名詞の複数形をつくる -s と同様、音声的なかわり語尾があらわれることを別にすれば、動詞語幹とのくっつきかたは、表現面として N-s とおなじ程度に膠着的な性格をもつ。一方、内容面では、「三・単・現」の名のとおり、人称・数・テンスのみっつのカテゴリーにまたがっている点で、N-s とちがい V-s は重義的である。つまり、屈折語本来の融合的な性格を露呈している。

（6）ヤルツェーヴァ主編 1990『言語学百科辞典』の「膠着」の項をみると、「ひとつの接辞にふたつの意味がかさなっている事例はまれである。」とある。例としてナナイ語で接辞 -ru が命令法をも現在テンスをもさししめすことをあげているが、これが、表現面で膠着的な性格の接辞 -ru が、内容面で重義的であっても、なお膠着のワク内におさまる、まれなばあいとしてあげられているのだったら、レフォルマツキーの基準の 2 と 4 が一挙に実現していなくて、4 のほうだけが、つまり表現面での膠着がなりたっていれば、それだけで膠着にいれておいていいことになる。表現面での膠着といいだすと、当然内容面での膠着ということもかんがえられるが、まず、前者をながめておく。

（7）ロジェストヴェンスキー2002『一般言語学講義[6]』をみると、膠着概念がもっぱら表現面の膠着をさしていることが、具体例によってはっきりとしめされている。そこにはロシア語での膠着の例として хороший よい、хорошего、хорошему、хорош のような語形変化があがっている。この語形変化の例示の一番うしろは хорош だが、ロジェストヴェンスキー『一般言語学…』にしたがえば、まえにあげた語形は、この独立で

---

6 タイトルは《Лекции по общему языкознанию》なのでそれを訳した題名をのせておいたが、おくづけほかでは《Курс лекций по языкознанию（言語学講義教程）》となっている。

きるかたち хорош に-ий、-его、-ему がついてできているから膠着になるのだろう。

コムリー1989(第 2 版)松本克己・山本秀樹(訳)1992『言語普遍性と言語類型論』は、融合タイプの具体例としてロシア語の stol テーブルと lipa 菩提樹をあげているが、ロジェストヴェンスキーの分析だと、stol の曲用は語幹＝単語の stol は –a (単数属格)、-u (単数与格)などの接辞のついた膠着的なつくりになるだけでなく、lipa のほうも、複数属格に lip があるから、それ以外の曲用形は、lip に膠着接辞のついたかたちととらえられることになる。このように融合＝屈折と認定される範囲がせばめられる結果、ロジェストヴェンスキー『一般言語学…』に「ロシア語では屈折性は膠着にくらべてしめる位置がちいさい。」のような一節があっても、おどろくにはあたらない。さすがに、ロシア語は膠着語だなどとはいっていないが。

日本語で一段(弱変化)タイプの活用をする動詞は、ウケール、ウケータのように分析される。そのさいとりだされるウケーというかたちと、独立して使用される連用形ウケとが同一か、それとも同音形式かは問題にすることなく、独立して使用できるかたちに(みかけ上)かさなる語幹ウケーを出発点として、ウケール、ウケータ、ウケーロほかの弱変化タイプの語形群がなりたつから、ここには膠着がみられるといったとしたら、ロジェストヴェンスキーの所論にちかいだろうか。日本語の動詞語尾のール、ータがテンス、ムードのカテゴリーにまたがって、重義的である点も、ロシア語形容詞、名詞の例の重義性にかさなる。

膠着の出発点としての語幹＝単語

（8）ロシア語の形容詞 хороший にしても、名詞 stol、lipa にしても、たとえ表現面では接辞が膠着するといったとしても、内容面では性、数、格の(形容詞はさらに比較も)カテゴリーにまたがっているから、膠着に特徴的な、単義的な接辞をかかえた語形とはいえない。重義的な接辞が機械的に膠着する点で、英語動詞の三・単・現の -s とお

なじグループに属していて、ここにも典型的な膠着からのずれがみとめられる。

もうひとつは、хороший という、ふつう代表形として辞書のみだしになる男性単数名格のかたちからみて、その曲用形のメンバーのひとつである短語尾形の хорош を出発点にして、それに重義的とはいえ接辞が「膠着」して、形容詞の曲用形が(同様に名詞の曲用形も)なりたつという図式が、表現面にかぎっても、チュルク語や日本語などの名詞の語幹＝単語に曲用接辞が膠着する典型的な膠着とぴったりかさなるのかという問題である。日本語の名詞の(格の)マークなしのかたちは、ハダカ格という表現面での無規定性とともに、意味・機能に関する内容面でも、はなしことばまでひろげれば、時間、数量、ならべ、よびかけ、述語的な用法、主格的、対格的な用法など、やはり限定されないひろい領域におよんでいる。この点で〈主格〉にひきよせられない nominative case 名格としてはたらいている。方言には、この傾向がもっときわだってあらわれることがあるが[7]、それは膠着タイプの言語の特徴としても登録できるものかもしれない。

しかし、хорош や stol、lip のような、ロジェストヴェンスキーのいう「膠着」の出発点となるかたちからは、それとちがう面がでてくるようだ。nominative case である stol は別あつかいするとしても(接辞の重義性とパラディグマッチクにみたばあいの非

---

7 松本 2005「マークされない名詞のかたちをめぐって」で奄美大島北部方言の名詞のハダカ格Ｎφ形について、「Ｎφ形の通用範囲は…標準(文章)語よりもひろい。」とその内容面のひろがりをさしだしたが、それをゼロ接辞さえもついていない語幹＝単語性、というところまではつきつめていない。しかし、他のマークされた格形に対立する、ゼロ形態素の想定されたＮφ形を、内容面での奔放さは、ハダカ格(基本格)から区別される、格以前のハダカ形なのではないかというようなことも、かんがえておく必要がある。このことに関連するが、ポリヴァーノフ 2010『言語学· 文学用語辞典』は、名格 nominative case の説明でラテン語やロシア語にくらべてチュルク語の名格(ハダカ格)の意味負担がはるかにひろい、として、なづけ、主語、よびかけのほか名詞述語、連体機能、対格機能、ばしょ格的、副詞的機能などをあげ、言語の形態論的なタイプによる格の内容面のちがいを指摘する。

膠着性の問題はおく)、хорош、lip のかたちは積極的に特定の内容面をになうゼロ形態素にとりつかれている点で、膠着タイプの名格(ここではハダカ格とか基本格といったほうが適切だろう)とはちがうのではないか。lip は複数属格のかたちであって基本格ではない。形容詞短語尾形 хорош も同様だろう。これらのかたちには、用法のひろがりの点で、膠着タイプの語幹＝単語的な性格がでてきつつあるのだろうか。ただ、そうでなくても、まったくの外形＝表現面で、膠着現象のめばえのようなものがあることはかんがえられるというのかもしれない。

膠着の内容面

(9)このように、内容面では重義的だが表現面では膠着的な性格の接辞や接辞づけの問題が、膠着現象が文法的なてつづきという表現面にかかわるものであるためか、内容面でなく表現面を重視するあつかいになって、膠着にくみこまれるのは、それなりに理由があるようでもある。では、うえと逆の、内容面では膠着的、つまり単義的だが、表現面では融合的な接辞や接辞づけは、どのようなあつかいになるのか。

『言語学百科辞典』の「膠着」をみなおすと、最後のところに、「ときには≪膠着≫の概念において接辞の単義性にアクセントがおかれることがある。このばあいは、文法における内容と形式の結合のタイプとして、屈折性に対する膠着性のことをいっている」[8]とある。これが、内容面では膠着的＝単義的な接辞が、表現面では非膠着的につらなっているばあいも、膠着ということがある、ということだとしたら、うえにのべた現象は、屈折とはみなされず、やはり膠着にいれられるだろう。

ワシリエヴァほか 1995『言語学用語小辞典』の膠着の説明は１、２にわかれ、融合に

[8] なお、『言語学百科辞典』の各項目はいずれも執筆者を明示しての記事になっているが、「膠着」の項はどういうわけが執筆者名がおちている。参照項目としてでている用語のうち、「融合」「屈折性」などがブルィギナ・テ・ヴェ、クルィロフ・エス・アの共同執筆なので、「膠着」の項目も両名か。

対立する膠着と屈折に対立する膠着とを対立させている。前者が表現面での膠着、後者が内容面での膠着とまでわりきることはできないとしても、屈折に対立するという意味を「…形態素における形式と内容の相関のタイプのひとつで、形態素の単義性に表現される…」と説明しているところからみると、屈折形態素の重義性に対して膠着形態素の単義性という内容面での膠着性を強調しているようである。だとすれば、いまみた『言語学百科事典』の説明と共通している。

両辞典の説明はともに、膠着の表現面と内容面の対立と統一の問題にかかわっているように、小論の筆者にはかんがえられる。

（１０）表現面で非膠着的、内容面で膠着的という現象のあつかいにからんだ、最近の論考としてマーチン・ホウダ 2008「ポーランド語からみた日本語 ― 語形変化と文法的なカテゴリーをとおして」がある。そこに日本語について「…名詞の他の（基本形以外の ― 引用者）語形を作るには、基本形に接辞をつけるだけでじゅうぶんだが、動詞の場合はすでについている語尾をいったん取り外して他の語形を作らなければならないわけである。しかし、そのてつづきは名詞とおなじく膠着である。」とのべているのは、ノマ・サレ・ナカッ・タのような接辞連続が（最後のタをのぞいて）単義的につらなっている点をふまえての指摘だとおもわれる。だとすれば、ホウダ「ポーランド語からみた…」のいおうとしていることは、『言語学百科辞典』の「膠着」の項の末尾に記されている内容とおなじ膠着のとらえかたということになる。レフォルマツキーの基準からは直接でてこないが、このような膠着理解も、伝統的な言語学のものだったのだろうか。そして、形態論的な言語タイプへの位置づけで、日本語を膠着タイプとする一般的な見解は、その出発点において、これら諸辞典に紹介されているみかたやマーチン「ポーランド語からみた…」のような説と、どのようにきりむすんでいたのだろうか、というようなこと

が気になってくる[9]。

（１１）ホウダ 2008 のように日本語の動詞の広義の語形のつくりまでを膠着とみとめるたちばからだと、非膠着的な接辞というのは、表現面で非膠着＝融合的であることと、内容面で重義的であることとのふたつの条件がみたされている必要がある。標準語の動詞活用からひろうと、鈴木「膠着」のあげる yom-u、yoñ-da のようなつくりは、語幹が非独立だからそれにつく接辞との関係は融合的だし、-u、-da のような接辞＝語尾もテンス、ムードのカテゴリーにまたがっていて重義的である。その他のレフォルマツキーの基準にてらしても、鈴木「膠着」があげているように融合的だから、ホウダ 2008 が日本語の動詞の語形のつくりを、すみからすみまで膠着的だといおうとしているのだとしたら、ここはあてはまらないのではないか。

---

[9] さきにも例をあげた『世界の諸言語　ロマンス諸語』のチェルィシェヴァ、チェルダンツェヴァ「イタリア語」は、イタリア語の接辞づけによる単語つくりにおいて、cartellonictica(ポスター技術)が carta＋ello＋one＋ista＋ica に由来することを、「しばしば接尾辞は単語つくりのステップごとにつぎつぎと＜くしざし＞にされる(нанизываются)」と説明する。＜くしざし＞といういいかたは松本編 1978『日本語研究の方法』の「解説」でも奥田靖雄におしえられてつかっていて、そこでは「……日本語も動詞のばあいはかならずしも膠着的ではなくて、ヨーロッパ語の動詞とおなじように、融合的 fusional である。そうだとすれば、接尾辞の分離では、くしざしのだんごからひとつひとつだんごをとりはずすように接尾辞をとりはずすわけにはいかない」とのべている。イタリア語の例が、接辞のつながりがに融合的だとしても、さかのぼればもとの接辞にいきつくことから接辞のくしざしというのだとしたら、内容面での単義性をとらえて、そういっているようである。しかし、膠着とはいわないでくしざしというのは、それを膠着とは区別する態度のあらわれなのだろうか。また、日本語でウケナカッタをウケ＋ナク＋アリ＋タルに由来するというのと、イタリア語の接尾辞連続のばあいとでは、前者は単に語源的、固定的であるのに対して、後者は生産的なてつづきであるといったような、現代語という共時態での動機づけられ性にちがいでもあるのだろうか。

名詞の語形でも、松下大三郎『日本俗語文典』にあげるツキャー(月は)のようなかたちなら、さきにみたような「月は」の表現面の膠着的な性格と内容面での非膠着＝重義性との対立がきえて、表現面で融合的、内容面で重義的ということになり、膠着ばなれが成立したといえるようである。

（１２）亀井孝ほか編 1996『言語学大辞典』術語編の項目「屈折」のところに、[膠着語型言語における屈折]というこみだしをもつ箇所がある。そこには、「たとえば、日本語の用言では、しばしば、いくつかの接辞を膠着させて用言複合体(verb complex)をつくる。その際、語幹と接辞の切れ目がはっきりしていて、しかもその接辞は原則として一定の文法的機能を示しているが…」のような説明がみられる。ここにいう「膠着」は、ヤルツェーヴァ主編『言語学百科辞典』～ホウダ「ポーランド語からみた…」とおなじもののようである。なお、用言複合体は『言語学大辞典』に項目があるが、「仮に…動詞複合体(verb complex)とよぶことにし」たものを、日本語の実情にあわせて「用言複合体」といいかえたらしい。

膠着概念の広狭

（１３）このようにみてくると、文法的なてつづきのひとつとして、強固に安定した膠着というものはどうも存在していないようで、せまいものからひろいものまで、多様な膠着理解が現におこなわれているかにみえる。せまく理解された膠着から順にひろいものへとたどっていく。

膠着的な性格の表現面と内容面とのかかわりからみて、もっともせまい膠着理解は、表現面でも膠着的、つまり語幹が一定不変で、語幹＋接辞連続のどこできっても、語幹をふくむ部分が独立できるし、内容面でも膠着的、つまり接辞が単義的につらなるばあいである。ただし、シンタグマチックな語形のつくりだけをみたばあいは膠着的といえ

ても、当の膠着形と内容面で同一のほかの語形とをパラディグマチックにならべてみたとき、語幹の変化が生じたり、接辞の標準性がそこなわれたりしていれば、もっともせまい膠着とはいえなくなる。日本語の名詞＋助辞は(鈴木 1973 のいうように助辞が単語でないとして)、パラディグマチックにならべても、別の語幹があらわれたり、標準的でない接辞がとびだしたりはしないから、まともな(あるいはまともすぎる)膠着である。英語の名詞の複数形 N-s はシンタグマチックにみただけなら、日本語の名詞＋助辞のように、膠着といっていいが、パラディグマチックにみると、ふるい曲用ののこりかすに邪魔されて、真正の膠着とはいえなくなっている。

（１４）二次的な膠着は二類にわかれる。どちらも、膠着の表現面と内容面の不一致がみられる点で、一次的、中心的な膠着から区別される。

ひとつは、表現面には膠着的な性格があらわれているのに、内容面には接辞の重義性がみられることによって、典型的な膠着からずれるばあいである。さきにあげた英語のV-s や日本語の主語のＮ－ハなど[10]。

もうひとつのズレは典型的な膠着が表現面では実現していなくて、融合化してきているのに、内容面では接辞の単義性がなおたもたれているといわざるをえないばあいである。『言語学百科辞典』ほかの「膠着」の項でも言及されていたし、ホウダ「ポーランド語からみた…」の指摘もこの類を膠着にいれている。『言語学大辞典』の「用言複合体」の説明も、同一の膠着観にもとづいているようである。

奥田靖雄 1985『ことばの研究・序説』にも、あとがきに「すでに渡辺実氏によって指

---

[10] 日本語のかかり助辞(陳述助辞)にはーハのあつかいをあてることができるが、副助辞(修飾助辞)のほうも、「太郎だけ　うしろを　むいて　いる。」「花子は　いもばかりたべた。」(高橋太郎ほか『日本語の文法』) の「太郎だけ」「いもばかり」は、文章語でハダカ格にはおきかえられないが「太郎が」「いもを」にはできるから、かかり助辞のばあいと同様、とりたてと格とが重義的であるとみとめておきたい。

摘されていることだが、日本語の suffixation は膠着的であるために、モダリティーの階層は手にとるようにみえる。」という一文がある。動詞の語形つくりに関して、いわゆる動詞＋助動詞連続の相互承接のことをいっているのはあきらかである。suffixation が膠着だけでなく、語幹と非膠着的な語尾との関係も suffixation だということも奥田からおそわった。しかし、ここで「日本語の suffixation が膠着的である」とのべているのは、注 9 にみたように、これも奥田に直接おしえられて、日本語動詞の語形つくりについて、「接尾辞の分離では、くしざしのだんごからひとつひとつだんごをとりはずすように接尾辞をとりはずすわけにはいかない」とかいたときの膠着とおなじではない。これは、動詞の suffixation についてうえにみてきた内容面での膠着性を奥田がいっていると理解したい。

（１５）以上みてきたさまざまな膠着をつぎのような図でしめすことができる。なお、一次的な膠着も、パラディグマチックなつきあわせで問題のでない(a)と、非標準性がみえてきたりして膠着度のひくい(b)とにわかれるが、これは三次元の表にしないとでてこない。

膠着の区分	二次的な膠着Ｂ	一次的な膠着Ａ(a), (b)	二次的な膠着Ｃ
内容面	（重義的）	単義的	単義的
表現面	「膠着」的	「膠着」的	（融合的）

こうして、膠着というとき、それがつぎのどの範囲かはまちまちだが、Ａ(a)を最狭義の膠着とすれば、Ａ＋Ｂ＋Ｃは最広義の膠着である。ただし、Ｃを膠着とすると、Ａ, Ｂは膠着という接辞づけによる総合的なかたちから，分析的なかたちへとうつすみかたがでてくる。さきにふれたポリヴァーノフ『言語学· 文学用語辞典』では、「膠着」の項目で、接辞の単義性をとりあげながら、この点で膠着的な言語のことを分析的な言語ともよん

でいる。

膠着～屈折の連続性

（１６）膠着現象を一次的、典型的な膠着と二次的な膠着とに、うえのような区分したばあい、二次的な膠着としたものに関しては、屈折(融合)との関連が問題になってくる。屈折にも一次的な屈折と二次的な屈折があるとしたら、二次的な膠着と連続している、というよりかさなっているともかんがえられそうである。

この点で市河三喜編 1953『研究社英語学辞典』(増訂版）の膠着、融合にかかわる説明は、両者の対立をとりあげるだけでない、それぞれに関して膠着度、融合度のような段階差、さらに膠着～融合の連続性をもみようとする説明になっている。Fusion の項には軽度の fusion、高度の fusion、完全な fusion が例とともに区別されている。つぎに引用するのは、Morphological classification of languages（言語の形態的分類）の膠着語、屈折語の説明である。まず膠着語から。

> …この類(膠着語～引用者補)に属するとされる言語間にも膠着の程度に程々の相違が見られる。チベット語の如きは接辞膠着の度が弱く、トルコ語の如きは強いといはれる。即ち前者孤立語に近接し、後者は屈折語に近いのである。

屈折語の説明では屈折と膠着との関連が十分に意識されている。

> 屈折語とは高度の膠着を行ふ言語、語幹と接辞との区別はたゞ抽象的にのみ認められるに至つたものをいふ。…屈折（inflexion）の最も進んだ形は、foot—feet, sing—sang—sung の如き変化…に見られる。…この種の屈折から見ればラテン語の屈折（例へば emittentur (=they shall be sent out)）の如きは膠着とも云へるわけで…

小論も結果としてふるい『英語学辞典』のこの説明をうけいれて、自分にわかりにくかったところを確認したうえで、ひきのばしたものということになりそうである。

内容類型学と膠着

（１７）内容類型学的な言語タイプと従来の形態論的なタイプとの関係について、クリモフ 1977『新しい言語類型学―活格構造言語とは何か』でつぎのようにいう。

> …活格構造を具体化し得るのは、膠着型言語や屈折型言語だけではなく、その形式的なタイプが孤立型である言語（この場合は、活格構造にとって特徴的な関係が、特に補助語によって表される）においても然りである。こうして、例えば、表層的な統語法の特徴に基づいて活格（ないしは不活格）構文の一般的な定義を行おうとしても、それは克服し難い困難にぶつかるのである。

引用部分でふれている孤立タイプにあらわれる活格構造については、補助語のほかに語順で、活格のほうは Nact＋V、不活格のほうは V＋Ninact のようにあらわしわけることもかんがえられるが（松本 1991「琉球方言と中国語―クミタテのつきあわせから―」参照）、それは別として、ここには活格タイプと各種形態論的なタイプとのあいだに必然的な連関の存在しないことがしめされている。

（１８）しかし、クリモフ『…活格構造…』にはその一方、内容類型学的な諸タイプの言語の、名詞の形態面に関してだが、活格タイプやそれにさきだつとクリモフによってかんがえられている中立タイプ、類別タイプをとりあげて、以下のようにのべている箇所がある。

> （活格タイプに関していえば―引用者補）名詞の分野では、形態面にいくらかの発達が観察される。…活格と不活格の対立の発生は、それ自体名詞曲用の形成の事実を証するもの、と考える理由がある（おそらく、中立類型や類別類型の格パラダイムについては問題になり得ない。）

ここからは、内容類型学的な言語タイプが、形態論的なタイプとまったく無関係にあらわれてくるのではないことがよみとれる。活格タイプ（以後）における名詞曲用の形成

ははじめの引用部分にしめされるように、膠着的であっても屈折的であっても、また分析的なてつづきによるものであってもいいのだろう。しかし、それらの段階は、曲用形成以前の段階とはあきらかに区別される。格パラダイムの形成は、内容類型学のレベルにも形態論的なタイプのレベルにもまたがっている。一般に、活格タイプ以後の形態論的なタイプの同等性、循環性がいえるとしたら、それも内容類型学的なタイプと形態論的なタイプとの相関をしめすものだろう。

屈折言語が膠着タイプへと変化する方向性がしめされていて、しかも一定の段階をふみこえたばあいの膠着性を、痕跡化した屈折性ののこりかすにこだわって、融合タイプのがわにおしもどすのは、現象の発展性を、言語タイプの変化の方向性をとらえていないことになる。日本語の動詞の語形のつくりも、鈴木「膠着」に「現代語にちかづけばちかづくほど融合的である」という指摘があるとおり、膠着ばなれを方向性としてしめしている。

膠着度？　―おわりに―

（１９）このような膠着、屈折のどちらがわからみても周辺的、二次的といえる膠着＝屈折的な領域があるから、膠着、あるいは屈折の説明は、一次的、典型的といえる例でしておく必要がある。この点で『言語学大辞典』の「膠着」の項目の説明は、鈴木「膠着」にくらべて、出発点としても役にたつとはいえない。まず、さきにあげたサピア『言語 ― ことばの研究序説 ―』にみたような例示の慎重さがみられない。日本語の例をあげるのは大変いいが、「オオキーサ」一例だけですませようという態度が気にいらない。しかも、語幹オオキーと接辞ーサのくっつきぐあいを、「このように、語幹と接辞の切れ目が明白で、あたかも…」のように解説するが、語幹オオキーはレフォルマツキーの基準の語幹＝単語としてはたらかない拘束語幹である。これとのくみあわせで膠着をしめすのでは、一次的な膠着性をあつかっているとはいえない。さきの図示でいえばＣ段階

の二次的な膠着を代表例としているようなものである。鈍感ーサとか、おだやかーサとかのナ形容詞でなければ、イターサ(ア　イタ！)　コワーサ(オー　コワ)　サムーサ(オー　サム)のような例のほうがまだよかっただろう。格助詞、副助詞は単語だからというたちばであっても、アルタイ諸語の膠着現象からとりだした語幹＝単語性をもっと考慮してかいてもらいたかったとおもう。

膠着概念にいままでみてきたようなゆれはばがあるとしたら、それをかんがえにいれたうえでないと、「膠着度」のような計量的なとりあつかいは有効なものにならないだろう。無理に手をいれてゆれはばを無視するような単純化ができるほど、膠着の内容が安定しているとはおもえないというのが、小論の筆者の率直な印象である。

おもな参考文献

市河三喜編(著)1953『研究社英語学辞典』増訂版　研究社

亀井孝ほか編 1996『言語学大辞典　第 6 巻　術語編』三省堂

クリモフ　ゲ.ア. 1977　石田修一訳 1999『新しい言語類型学―活格構造言語とは何か』三省堂

コムリー　B.H.1989（第二版）松本克己・山本秀樹訳 1992『言語普遍性と言語類型論』ひつじ書房

サピア　E. 1930 安藤貞雄訳 1998『言語 ― ことばの研究序説 ―』岩波文庫

鈴木重幸 1973「膠着」(教科研国語部会『教育国語』35　むぎ書房)

竹内和夫 1996「トルコ諸語の品詞」(『国文学解釈と鑑賞』1996　1 月号　至文堂)

――――2008「アルタイ語学者からみたニホン語文法」(『国文学解釈と鑑賞』2008　1 月号)

マーチン　ホウダ 2008「ポーランド語からみた日本語―語形変化と文法的なカテゴリーをとおして」(『国文学解釈と鑑賞』2008　1 月号)

松本泰丈 1975「総合的なかたち synthetic form をめぐって」(『国語国文論集』4　学

習院女子短期大学国語国文学会）

————(編著)1978『日本語研究の方法』むぎ書房

————1991「琉球方言と中国語―クミタテのつきあわせから―」(松本 2006『連語論と統語論』至文堂)

————2005「マークされない名詞のかたちをめぐって」(『国語と国文学』1 月号　至文堂)

Вархударов Л.С. и др. 2000＜Английский　зык＞バルフダロフほか「英語」//Ярцева В.Н.（гл. ред.）《Языки мира　Германские языки.　Кельтские языки》M.　Academia

Васильева Н.В. и др. 1995《Краткий словарь лингвистических терминов》ワシリエヴァほか『言語学用語小辞典』M.　Рус.яз.

Нарумов В.П. 2001＜Испанский　язык＞ナルモフ「スペイン語」//《Языки мира Романские языки》

Поливанов Е.Д. 2010《Словарь лингвистических и литературоведческих терминов》ポリヴァーノフ『言語学・文学用語辞典』M.　ЛИБРОКОМ

Роджественский Ю.В. 2002《Лекции　по　общему　языкознанию》ロジェストヴェンスキー『一般言語学講義』M.　Академкнига

Челышева И.И., Черданцева Т.З. 2001＜Итальянский　язык＞チェルィシェヴァ, チェルダンツェヴァ「イタリア語」//《Языки мира　Романские　языки》

Ярцева В.Н. (гл. ред.)1990《Лингвистический　энциклопедический　словарь》ヤルツェーヴァ主編『言語学百科事典』M.　Советская　энциклопедия

小論は 2010 年 8 月白馬日本語研究会合宿発表会で発表したものに、今回手をくわえた

ものである。

（つけたり）動詞語彙がその意味範囲で動作のどの段階までをあらわすかをめぐっては、宮島達夫「『ドアをあけたが、あかなかった』－動詞の意味における〈結果性〉－」、「動詞の意味範囲の日中比較」をはじめとして、一連の研究がある。それらを参考にすれば、日本語動詞の意味範囲が結果をふくまない点を強調することができるのは、日本語を英語と対照させたばあいで、日本語を中国語と対照させると、逆に、日本語動詞の意味範囲が結果をふくむ面が強調されるようである。動詞の意味範囲の特徴がかくかくであるといおうとするとき、対照言語のちがいによって、まったく反対になりえることがうかがわれる。

これとおなじことが、日本語の膠着性に関してもいえるのではないか。日本語とポーランド語を対照させたときは、日本語の動詞さえも、その膠着性が強調される一方、日本語とチュルク語とを対照させると、日本語動詞の膠着ばなれ性、および名詞の膠着以前性が目にはいる。というように。マーチン·ホウダ、竹内和夫の論を位置づければ、動詞の意味範囲でみたのとおなじことが、ここにもあらわれてくる。ポリヴァーノフが、膠着のことを接辞づけと明言する一方で、屈折タイプを総合的としながら、それから区別して分析的とするのも、代表的な屈折語のひとつとポリヴァーノフ自身がみとめているロシア語を母語とする研究者のがわからのみかたという面がでているのだろうか。

言語の対照研究で、あるいは対照研究をおもいえがきながら言語について記述していると、他言語との統一の面より対立の面が強調されやすいことは、対照研究をすすめるばあい自覚しておく必要がありそうだ。